

【注意】 答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。  
本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

以前、目の見えない知人が、柱にぶつかるのは悪いことじゃない、と言っていた。目の見える側からすると、柱にぶつかるのは「あぶないこと」だ。けれども彼らにしてみれば、ぶつかることだって「ああ、ここに柱があるのね」という知覚方法の一種である。ある観点からすれば「しつぱい」でも、<sup>①</sup>別の観点からすれば「せいこう」だ。

ここ二週間の私は、まさに「柱にぶつかりまくっている」状態である。三月末に桜の咲きかけた日本を離れ、アメリカのボストンに移住。家族とともに、半年ほどこちらに滞在する予定だ。慣れない土地にいて、自分にとって当たり前だと思っていたことが思わぬしつぱいであったりする。でもそのことによつて「へーしつぱいなんだ！」とそこに柱があったことに気づく。

たとえば数字「0」の発音。美術館に行くと、来訪者の情報を集めるために居住地の郵便番号を聞かれることが多い。私が住んでいる地域は郵便番号が0から始まるので、「ゼロ、トゥー、……」と言っていると、相手が聞き返してくる。それで、もう一度「ゼロ、トゥー、……」と言うが通じない。仕方なく、紙に書いて伝えるはめになった。

それから数日後。テレビのCMを見ていて、何が「柱」だったのか分かった。0の発音は「ゼロ」ではなくむしろ「ズイロウ」のような感じなのである。まさか「ゼロ」がカタカナ英語だったとは。それ以来、そのタイミングがくるたびに、あのCMのコメディアンを真似て、思い切り「ズイロウ」と発音している。

あるいはスーパーに行ったとき。アメリカはクラフトビールがおいしいと聞いていたので、夕食時に一杯やりたくてぶらぶら店内を物色していた。ところがどこを探してもビールを売っていない！ ビールどころかワインもウイスキーも売っていない！ おかしいと思ってレジの店員さんにたずねると「うちはアルコールを売る店じゃないのよ」との返事。それならばと軒目のスーパーに入ったが、ここでも結果は同じ。結局、小さな酒屋を見つけて、やっとこさビールにありつくことができた。

あらためて調べてみると、ここマサチューセッツ州では、特別な許可がないかぎりスーパーや食料品店ではアルコールを扱ってはいけないことになっているそうなのだ。つまり、それだけアルコールに対する警戒心が高いということ。夕暮れのスーパーで「ビールはないのか？」と訊いてくるアジア人は、そうとうヤバイ客に見えていたかもしれない。

救いなのは、こちらに来てから一度も、しつぱいを恥ずかしいと思わずに済んでいることである。私がいくらおかしな発音をしたり、あやしい振る舞いをしたとしても、相手は怪訝な顔をしなないのだ。「ゼロ！」と言い張っても、「なぜかしら、私には聞き取れなくて……」と本気で考えてくれている風だし、「ビール！」と質問しても笑顔で首を振る。もしこれが、「何を言っているんだこいつは」という態度で返されていたら、わたしのしつぱいは恥となり、次のチャレンジをする勇気を失っていたらろう。

<sup>②</sup>逆もまたしかりである。ボストンは海辺の町ということもあり、ファストフード店などでもパックに入ったサーモンの寿司を売っている。サーモンニアの九歳の息子は当然食卓に並んだそれにとびつき、ぱくぱくと口に入れた。「ん、おいしい！」と口にはしたものの、なんだか微妙な顔。サーモンは確かにおいしいのだが、シャリに使われている米の種類がコシヒカリやあきたこまちではなく、こちらで主流のジャスミンライスで、「日本のとはなんか違う」のだ。

息子も最初は「なんか違う」派だった。日本の本物の寿司が食べたい、いつものラーメンが食べたい、と駄々をこねていた。けれどもお母さんがいかにしつぱいしているか、そしてそれに対してこちらの人が寛容か、という話をしてから、態度が変わってきた。「本物にせもの」「いつもの／へんな」という二分法が、いかに人を傷つけるかに気づいたのである。お母さんがしゃべるブロークンな英語もたくさんある英語のひとつだし、アメリカの粘り気のないお寿司もたくさんあるお寿司のひとつなのだ。どちらもしつぱいだし、同時にしつぱいじゃない。

ダイバーシティとか寛容さということが言われるけれど、しつぱいと付き合ひ方を考えることは、その第一歩なのかもしれない。自分のしつぱいを通して相手を知らなく、そして相手のしつぱいを通して<sup>④</sup>自分をひるげること。

いや、むしろ自分のしつぱいを経由しないダイバーシティなんて、単なる傲慢ごうまんでなくてなんだろう。しつぱいを通して、人は初めて自分にとっての「当たり前」を相対化するチャンスを得るのだから。「みんなちがってみんないい」とい「みんなしつぱいしてみんないい」だ。

(伊藤 亜紗「ゼロとお寿司」より)

(注) ダイバーシティ……性別、人種、国籍こくせきなどの違いを受け入れ、尊重すること。

問一 — ①「別の観点からすれば『せいこう』だ」とありますが、なぜ「せいこう」なのでしょう。

問二 — ②「何が『柱』だったのか分かった」とありますが、この例ではどのようなことを「柱」と表しているのですか。

問三 — ③「逆もまたしかりである」とありますが、ここではどういうことですか。

問四 — ④「自分をひろげること」とはどういうことですか。

□ 北海道の小樽市に住んでいる小学四年生の西村朝日は、お父さんと信用組合に勤めているお姉ちゃんとの三人で暮らしています。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

学校から家に帰ると、朝日は素早くランドセルを下ろし、肩ベルトを持って階段の下まで行って、腕を後ろに引いたのち、思いきり放り投げる。

いくらどんなにがんばっても階段のいちばん上には届かない。朝日の家の階段は途中で右に曲がっている。でもいつか届く日がくるのではないかと朝日は思っていた。ある日、なにかの拍子に大きく右に曲がるランドセルの投げ方を会得するかもしれないと期待しているからなのだった。

朝日の「期待」にはもうひとつあった。こうやって毎日放り投げていけば、ランドセルが早く傷む。ランドセルは、古びていればいるほどかっこいい。ところどころの縫い目がほころび、いくつか傷がつき、ふちがめくれ上がったかぶせのかつこよさは、一年生が背負うカブトムシみたいに硬くてつやつや光るその比ではない。

朝日のランドセルは着実にその状態に近づいていた。ことに、かぶせに付いている、二本の時計バンドのようなものくたびれ方などは相当いい線にいつているとひそかに自慢しているのだが、六年生のランドセルを見かけたら、まだまだだと思わざるをえなく、早くあの域に達したく、毎日の放り投げはもちろん、必要以上の回数と乱暴さを以てランドセルを開閉していた。たまに踏んづけてみたりもした。

それから朝日は水を飲む。使うコップは、ノルウェーの国旗のもようの入ったマグカップだ。

おととい、島田さんにももらったお土産である。島田さんはお父さんの友だちで、普段は会社員をしているが、実はスキーの「距離」の選手で、国内はもとより外国の大会にも出場している。二年前のオリンピックにも出たし、再来年の札幌オリンピックにも出るかもしれないほどの選手のだが、朝日の家では単に「お父さんの友だち」として扱われていた。島田さんは、年に数度やってきては、お父さんと無駄話をして帰る。かならず外国のお土産を持参し、「これはどこそこで買ったもの」と地名を言い、朝日とお姉ちゃんにわたす。おととい持ってきたのは「ノルウェーのオスロで買ったマグカップ」で、お姉ちゃんには「フランスのグルノーブルで買ったハンカチ」だった。

島田さんのお土産は、その年に行った外国のものではないところに特徴があった。たぶん、島田さんの家には、あちこちの外国で買ったお土産がたくさんあり、そのなかから、適当に選んで持ってくるのだろう、というのがお姉ちゃんの見見だった。

買ったばかりの新しいお土産を持ってこないのは、「なんとなくいたましい（もったいない）」からで、「そういうケチくさいところがあるから、スキーもパツとしないんでない？」と島田さんが帰ったあと、ビールジョッキを洗いながらつぶけた。

「辛辣だなあ」

お父さんがかぶりを振ったら、お姉ちゃんは、

「なーんか焦れ焦れすんだよね、あのひと見ると」

とそっけなく応じた。

『あのひと』っておまん」

お父さんはちよつと無理した感じで苦笑いをし、

「おれの友だちなんだから、気い使えや」

と、<sup>①</sup>わりと本気の声で言った。島田さんは国際大会で華々しく活躍したことがなく、かといって国内でも無敵というわけではない選手だった。それをお父さんはいつも、なにかというところから種にするのだが、自分が言うのとお姉ちゃんに言われるのでは話がちがうようだった。

それは朝日も感じた。お父さんが島田さんに言う「パツとしない」には長年の友だちならではの親しみと、成績こそふ

るわなかったが国際大会に出られたのだからいたしたものだという尊敬と賞賛が込められているが、お姉ちゃんの口にした「パツとしない」には、「パツとしない」よりほかの意味がなさそうだった。

でも、きつと、島田さんは、お姉ちゃんにそう言われても、お父さんに言われたときのよう「いやー」と短い横分けの頭を掻いて、日に灼けた四角い顔をほころばせるんだろな、と思った。眉毛も目尻も下げて、分厚い肩をすくめ、袴が片方なかに入ったポロシャツの胸元を上下させて、「は、は、は」と笑うんだろな、と。

「あれでもいいところはあるんだしよ」

お父さんが言いかけたら、お姉ちゃんは、濡れた手をタオルで拭いてから、ポニーテールのシッポの部分をつたつに分けてきゅつと引つ張り、結び目のゆるみを直して、

「気は使ってます。まさか面と向かって言うわけないじゃないの」

ただなんか ② 肝焼けるだけ、とシンクのふちを手のひらでトンと叩いた。

(お姉ちゃんはなー)

朝日は胸のうちでつぶやいた。 ③ 一年生の背負うランドセルみたいだ、というようなことをつぶづけて思った。総じて女子のランドセルは男子よりきれいだ、もしお姉ちゃんをランドセルにたとえたら、六年生になっても交通安全の黄色い布がよく似合う新品みたいな状態ではないか。革が硬くて、縫い目もほつれてないやつ。よほど丁寧に扱わないとそうはならない。

だからなのかもしれないが、お姉ちゃんは朝日がランドセルを手荒に扱うのが我慢できないようすだ。朝日の放り投げや踏んづけ行為を見つけると、「なんてことするの！」とただでさえ大きな目をひんむいて怒鳴る。ややしばらくキーキー声で怒ったあと、 ④ 低く、湿った声に変え、「そんなことをしたら、お母さんが悲しむ」と朝日がいちばんこたえる言葉を言うのだった。

それを聞くと、朝日は自分がこの世でもっとも悪い人間になった気がしてくる。お姉ちゃんが朝日を叱るときには決まりごとのように「お母さんが悲しむ」と言うので、朝日に見れば聞き慣れた言葉なのだが、言われると、いつも新鮮に、こころが黒く塗りつぶされる。朝日は写真でしかお母さんを知らなかった。お母さんは、朝日を産んだときに天国にとられてしまった。

(朝倉 かすみ『ぼくは朝日』より)

〈注〉 二年前のオリンピック……一九六八年、フランスのグルノーブルで行われた冬季オリンピック。次の一九七二年大会は札幌で開催された。

問一 ——— ① 「わりと本気の声で言った」のはなぜですか。

問二 ——— ② 「肝焼ける」とは方言の一つですが、話の流れから推測すると、どのような意味ですか。

問三 ——— ③ 「一年生の背負うランドセルみたいだ、というようなことをつぶづけて思った」とありますが、朝日はお姉ちゃんをどんな性格と考えていますか。

問四 ——— ④ 「低く、湿った声に変え」たのはなぜですか。

令2
— 中
— 国
— 5
— 5

㊦ 次の詩を読んで後の問いに答えなさい。

葉しや

蜂飼耳はちかいみみ

どうしているかな

引ひ越こしたあの子

きつとげんきだと思おもうけれど

そしてあたしもげんきだけれど

離はなれていくのがわかるよね

パンゲア大陸のように

すこしずつ離れていく

居場所を変えない榎かしのの木は

葉のようにあかるい

おなじページを何度でも読む

根もとに埋うめた箱のなかみを

いつまで憶おぼえていられるのかな

ふたりで作ったものが

森には まだまだ残のこっている

いっしょに掘ほった穴あなね

自分で落ちたよ こないだ

しばらく出たくなかった

〈注〉

パンゲア大陸……古代の地球には一つの大陸だけがあったという考え方があり、この大陸が分裂ぶんれつしてユーラシア大陸やアメリカ大陸ができたときとされる。

問一 「葉のようにあかるい」とはどういうことですか。

問二(1) この詩の行の配置には、どのような見た目の特徴とくちょうがありますか。

(2) (1)の特徴は、どのようなことを表していると想像できますか。

問三		問一
(2)	(1)	

問四	問三	問二	問一

問四	問三	問二	問一

解答用紙

2020
—
中
国

受験番号
氏名

評点